

# 卷頭言

学校長 江藤恭二

## I

研究紀要も本年度で第22集の刊行を迎えるにいたった。紀要の歴史は、成年を2年越えたところであるが、本校の歴史は岡崎高等師範附属中学校創立以来、通算して30周年に達する。本年は「而立」の年に達した本校の歴史をかえりみ、とりわけ研究・教育の展開のあとを整理しながら、蓄積してきた成果の今後におけるより強力な発展を期すべき年であると考える。

本紀要は、共同研究・教科研究・特別研究の3部門によって構成されている。本校の共同研究は、現在4つのグループに分かれており、昨年度にひきつづいて、A) 授業研究、B) 生徒指導に関する研究、C) 教育課程に関する研究、D) T.M.に関する研究、のテーマに分かれて研究成果を発表している。さらに、本紀要においては、教科研究の9篇の成果と、特別研究としての2篇の成果が発表されている。特別研究の中には、昨年度の「オーストラリア教育事情」について、「中国の教育改革について——体験的レポート——」が含まれており、本校教官の海外研修・視察の成果が蓄積されつつあるのは喜ばしいことである。

## II

先に述べたように、本年は本校にとって記念すべき年であり、一段と新しい教育研究上の飛躍が期待される年であるといえよう。そのためには、今後の発展への基礎的な視点を明確にすることが要請される。それは全く新奇な視点である筈がなく、従来の教育研究の蓄積を系統的に整理し、本校のあるべき基本姿勢に基づいて発展的に将来を展望することによって生ずる視点であることはいうまでもない。この視点は、創立30周年を契機にして、全教官の民主的討議を行なうことの中から確認されるべきものであろう。以下に述べる視点は、基礎的視点の一側面の試論的な提示にすぎない。

何れの学校においても、例外なく、教育実践の中心には授業が位置づけられる。前年度の紀要の「卷頭言」においても、私は教授学研究の基礎的視点を簡潔に述べておいた。今回もそれにひきつづき、近代教授学の basic principle の史的省察の一端を試みてみたい。

本校の教育方針の中に「心豊かにして主体性のある人間形成」という表現が出てくるが、授業（教科学習）を通しての人間形成はいかにして可能か。これが私の大きな関心事である。

教科学習がいわゆる「伝統的教育」の古い、注入的・暗記的な教授学理論に立脚しているかぎり、それが生徒の生活や経験を通じての人間形成に寄与することは考えられない。知識や観念の注入が、決して生徒の主体性を育てることになりえないことはいうまでもない。従って、授業（教科学習）が直接に人間形成に貢献するという場合、少なくとも旧式の教科理論が改められていること（教科によってニュアンスは若干違うであろうが）が前提とされねばならない。また、教材が「死せる知識」としてではなく、生徒の経験や生活の中で、生きて働く自由な主体的学力となり、生徒の生き方に結びついた実践的・行動的知性として形成されることが、とりわけ肝要である。

近代教授学の理論的基礎は、ラトケ、コメニウス、ルソー、ペスタロッチャー、フレーベル、ヘルバート、ディーステルヴェーク……などの偉大なる教育思想家たちによって先駆的に開拓されてきたことは周知の事実である。これら古典的教授学理論の発展のあとは、一言で表現すれば、教授（授業）にとりくむ教師の任務は、教科をつめ込み、教え込むことではなくて、生徒を教えること、生徒の生活を育てることである、という考え方への転換と発展の歴史であったといえよう。もちろん、学校での教授の実践において、教科やカリキュラムの重要性や必要性は指摘するまでもない。教科やカリキュラムなしでは学校の意図的な教育活動は成立しない。ただ重要なことは、教科のために子どもや生徒があるのではなくて、子どもや生徒の生活を育て豊かにするために、教科とカリキュラム編成とは構想されるべきであるという考え方なのである。とくに前近代的教授方法観から近代的教授方法観への転換という視点に立って考える場合、「教科を教える」ではなく、先ず「児童・生徒の力を育てる」という教授方法への発想は、あくまでも大事にされる必要があり、現在でも日本の現状を考えると、現場で教育を担当する教師たちが、この視点をしっかりと把握しておくことの肝要さはいくら強調してもしきれないほどだ

思う。

ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi : 1746 ~ 1827) によって本格的に拓かれた近代教授学の原理というものは、教材を教え込むことではなくて、あくまで教材を通して、児童・生徒の直観にうつたえて、内部から精神力を自己活動的に育て上げることであるといえよう。そしてそのためには、教授（授業）を児童・生徒の本性や心理や生活に即して展開すること、また生活のなかで行動的・主体的に知識をつかみとらせるこの工夫などが必要なことになるであろう。「教授を心理化する」とは、このことを意味する。しかもペスタロッチーの意図した心理化とは、いかえるならば「生活化」であろう。とくに晩年のペスタロッチーの言葉「生活が陶冶する」(Das Leben bildet.) は、近代教授学原理の不可欠の視点である。

何故ならば、この生活の原理によってはじめて、あらゆる教科の知識や観念が、児童・生徒の主体的な考え方や行ない方や生き方に結びつくものとして指導される最初の視点が生まれたと思うからである。そしてあらゆる教科が児童・生徒の直観（ペスタロッチーのいう直観は、ただ受動的にみることではなくて、主体的・能動的に生活をみつめる力を意味している）や自己活動を育て、児童・生徒の行ないや生き方に結びつくことによって、ますます彼らの人間性・人格性を培うことにもなる。

要するに、ことばや計算のしかたなどを教え込むのではなくて、「人間をつくるのだ」という近代教授学の前提に立てば、すべての教科が児童・生徒の人格的主

体性を生活のなかで陶冶することを、近代教授学は実験的な狙いにしてきたといってもよいであろう。

授業（教科学習）を通しての人間形成にとりくむ場合、教科の知識を一人一人の児童・生徒の具体的な生活の中で、あくまで主体的・実践的に、いわば「問題解決的」に把握させるというきめの細かい指導が配慮されねばならないであろう。教科の学習で得られる自然や社会や人間についての合理的・法則的な知識や認識が、単にそれとして教えられ、与えられるのではなく、一人一人の生徒たちが身近な学級や家庭の中で、一般に具体的なさまざまな生活の相において、どう生き、どう行動するか、という一人一人の問題に即して、つねにそこにひきもどされつつ学習を導かれることが大切なこととなろう。

以上のような近代教授学の基本原理に基づいたきめ細かい指導は、教師数に比べ生徒数の極端に多い一般的の公立学校では望むべくもない。このきめ細かな指導を可能にするのは先ず国立大学附属学校であろう。また、そのような指導・実践を通しての教育研究であってこそ、はじめて附属学校の独自な、意味のある研究課題となりえよう。本校30周年を機に、私は附属学校（とりわけ名大附属学校）固有の研究視点の一端を試論的に述べてみた。

拙論を一つの手掛りにして、本校の教育研究の積極的・具体的な展開が、また、本校の本来あるべき姿への探求が、一段と活気を帯びて進展することを心より期待している。